ヨアンネス・クリマクス『楽園の梯子（=*Scala Paradisi*）』における「欲望から超然としていること」とは何か？

—— *Gradus 2* を中心に[1)] ——

寺　川　泰　弘

序

シナイの聖カタリナ修道院の修道院長であったヨアンネス・クリマクス（Ioannes Klimax 579 以前-649 年頃）は，シナイの霊性をそのうちに体現し，霊的修行の世界で後世に至るまで読み継がれる古典を著した。イエス・キリストが 30 歳で洗者ヨハネから洗礼を受けて公的な宣教活動に至った時を第 30 段階に達したとして，そこに至るまでの一段一段の道程を霊的修道者（＝修道士）たちの辿るべき全 30 段の階梯（*Gradus*）として，クリマクスは自らの修徳修行の実践に基づく体験を織り交ぜながら，提供していく。それが，*Scala Paradisi*（『楽園の梯子』）である。

霊的修道者（＝修道士）は一段一段，自らの想いと心を込めて昇って行き，終局の完成すなわち「神との合一」へと向かう。クリマクスは梯子の終局の段階をパウロが愛の賛歌で宣言したように「信・望・愛」，とりわけ「愛」に置く。なぜなら「神は愛だから」（1 ヨハ 4:8）である。

本論は，*Scala Paradisi*（『楽園の梯子』）の神へと向かう霊的な 30 階梯[2)]のうちの第二の階梯（*Gradus 2*）である「欲望から超然としている

1）本稿におけるヨアンネス・クリマクスの引用は，すべて筆者によるギリシア語原典を基礎に仏訳を対照しながらの試訳である。*Gradus 2* においてはギリシア語原典の引用箇所と対照した仏語による『楽園の梯子』（*L'échelle Sainte*）の節の番号を以下のように併記した。
Ex. Deuxième Degré 1, (*Gradus 2*), 653C, DESEILLE (1978) p. 43.
その他の *Gradus* からの引用については，ミーニュの該当箇所を記した。

こと」と標づけられた階梯を読み解くことによって，そのことの意味とは何かを論究するものである。

第一の階梯では，「この世の放棄」とは何かが展開された。そこにおいての要求はまず外的な事柄の断念に向けられていた。それはこの世のすべての欲望から離れることであり，この世との関わりを絶つ完全な離脱，すなわちあらゆる虚栄，欲望を放棄するための熾烈なまでの実践を課するものであった。人は神へと行き着くために，自らの住み慣れた場所と情況を離れなければならない。言い換えれば，クリマクスは霊的修行の初めに立つ者に，生きることの方向転換，否応のない生の向き直しを徹底的に迫ったのである。こうして，「この世の放棄」という越え難い障壁にいきなり直面しながらもようやく登り切り，第二の階梯に足をかけた修道士は容赦なく次なる試練に晒される。

第二の階梯では「欲望から超然としていること」とは何か，が問題提起される。クリマクスは様々な諸相を見せる欲望のうち，とりわけ，修道士の胸のうちに立ち去り難く残る両親や血縁関係すなわち家族への甘美な郷愁を引き起こす絆を断ち切ること，言い換えれば，彼らとの別離を決定的なものとさせることに，その核心を置いているように思われる。

霊的な修徳生活を意志して歩もうとする者であるならば，彼をこの世

2） *Scala Paradisi*（『楽園の梯子』）の神へと向かう霊的な 30 階梯から成る梯子の各階梯の意味，すなわち修行の深まりとは何かを，本書の英訳版の〈INTRODUCTION〉を著した Bishop Kallistos Ware（以下，K. ウェア）は以下のように分類している。

〔Ⅰ〕現世からの離脱

1．この世の放棄　2．欲望から超然としていること　3．流謫

〔Ⅱ〕修徳の実践

（ⅰ）根本的な修徳

4．従順　5．悔悛　6．死の想起　7．悲しみ嘆くこと

（ⅱ）情念に対する格闘

（a）非肉体性を支配する情念

8．怒り　9．敵意　10．中傷　11．饒舌　12．虚偽　13．アケーディア

（b）肉体的，物質的情念

14．大食　15．渇望　16-17．食欲

（c）非肉体的情欲

18-20．無感覚　21．恐怖　22．虚栄心　23．驕慢そのうえ冒瀆

（ⅲ）活動的な人生へのより高い徳

24．愚直　25．謙遜　26．識別

〔Ⅲ〕神との合一　＝観想的な人生への転換

27．静寂　28．祈り　29．アパテイア　30．愛

に留まらせようとする金銭欲や名誉欲，あるいは食欲や性欲などはもがき苦しむ果てにではあろうが，自らを律して超えて行くことができるであろう。しかし，己が己であることの依って立つ根拠ですらある家族との絆を断ち切ることは，己を無に帰することに連鎖するがゆえに，修道士をこの世に留める最大の障碍になり得るであろう。それゆえ，このことを剥ぎ取り，超え出て行くことが，己を捨て去り真にキリストに従うこと，神に向き合うことであり，そこから救いを受け取るのである，とクリマクスは言明する[3)]。従って，この第二の階梯に注目することによって，真に霊的な修徳生活に入って行くことの意義が見出せるであろう。

その意義を見出すためには，この階梯において，以下に掲げる二つの主要な問いを提起しなければならないであろう。

第一の問いは，クリマクスが血の繋がりとしての「家族との絆を断ち切ること」を，なぜこの階梯で徹底して要求したのか，である。このことに応答するためには，この世の事どもを放棄して「キリストに付き従う者」とは誰なのか，そしてその彼が歩まなければならない途とはどのような途なのか，という根本的な問いを考察しなければならない。その途上で，どのような繋がりとしての家族こそが修道士には相応しいとクリマクスは考えるのか，その像を見出すことができるであろう。

第二の問いは，肉親への情愛こそをも「悪魔の手先」とみなすその悪魔との闘い，そしてそれが修道士にもたらすものとは何か，である。

その二点に注目し，考察することによって，この第二の階梯「欲望から超然としていること」が有している意義とは何かを明らかにしたい。

Ⅰ 「キリストに付き従う者」とは誰か？

「ペリ・アポステイアス」と標づけられている第二の階梯は，以下のパラグラフで始まる。

1. 真に主を愛する人，来るべき神の国の到来を真に探し求める人，自らの罪によって真に後悔し始めた人，永遠の苦悩と裁きの恐怖を真に心に留める人，自分自身の死の畏れに真に怯えを掻き立てられる人，そのような人は，金銭に関する気懸りや不安，財産，両親，友人，兄弟，あ

3） Deuxième Degré 1, (*Gradus 2*), 653C, DESEILLE (1978) p. 43.

るいは現世の世俗的な栄光，地上の悉くのものを，もはや愛することはないであろう。

この世の物事と結び付くすべてのものを断ちきるとき，そして彼のあらゆる心配事から自らを解き放ち，彼自身の身体さえも憎悪するようになるとき，あらゆることから彼自身が剥ぎ取られて行くことを実感するとき，その彼は気に懸ける心配も躊躇いもなくキリストにひたすら付き従うであろう。常に天を仰ぎ見ながら，そして聖なる人キリストの言葉に従って，そこから救いを受け取る。私の魂は汝の背後のすぐ近くに支柱を立てる（詩篇 62:9），とあるように。絶えず記憶されるエレミヤの言葉に従って言う。「私は汝の後を倦むことなくどこまでも付き従って行こう。生きることも死ぬことも，もはや私は望んではいないのだから（エレ 17:16）[4]。」

第二の階梯である「ペリ・アポステイアス」すなわち「欲望から超然としていること」においては，「この世の物事と結び付くすべてのものを断ちきること」が厳然と要求される。しかし，その要求に真摯に応えて行こうとするならば，「私は汝の後を倦むことなくどこまでも付き従って行こう」という道行きをさらに強固に決すること，生をも死をも超えてキリストにひたすら付き従うことを徹底して意志すること，そして聖なる人キリストの言葉に十全に従うこと，そのことのうちにあってのみ救いを受け取ることができるであろう，とクリマクスは修道士に諄々と説く。

ここには，「欲望から超然としていること」の標の背後に隠されてはいるが，「キリストに付き従う者」とは誰なのか，そのことをひたすら希求する者として修道士が歩まねばならない途とはどのような途なのか，その問いをこそ，彼らに問いかけ，それを生き抜く者としての覚悟と矜持を揺らぐことなく練り上げよ，と迫るクリマクスの厳然とした彼ら修道士への要求があるように思われるのである。

4） Ibid.

Ⅱ　信従者の資格とは何か？――家族の絆を断ち切ることをなぜ要求するのか，その聖書的根拠を巡って

クリマクスは，続けて第二パラグラフに移る。

> 1．私たちを呼ばわる主の声を聞いたあとで，先に述べたすべてを私たちは置き去りにしてこの世を捨て去った。そして私たちの差し迫った事態の時，言い換えれば，私たちの死の時に訪れる救いにとって何ら援けとなり得ないことで気を病むことは，私たちにとって大いなる不面目である。というのは，主が言うように，このことは，「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は，神の国にふさわしくない[5)]」を意味するからである。私たちが未だ駆け出しの修練者であり，現世の世俗的な人々とともにいることに慰みを得ようと望んだり，彼らを訪ねたりする事を通じて，いかに安々と疑いもなくこの世に向き直り易いかを主は知っているので，誰かが，「主よ，まず行って私の父を葬ることを許してください[6)]」と尋ねたとき，私たちの主は，「私に従え，そして死人どもに彼らの死人たちを葬らせよ[7)]」と敢然と答えて言ったのである[8)]。

霊的な修練に勤しむ修道生活に入って行くことの困難さと同時に，ここには，どこまでもキリストに付き従うことを意志する者に突き付けられたその資格とは何か，果たさなければならないその使命とは何かという問いが提起されているように思われる。そして，何よりもクリマクスが霊的には未だ駆け出しの身に過ぎない修道士に「家族の絆を断ち切ること」をなぜこの階梯でことさら繰り返し要求したのか，そのことの真意を探るために，ここで言及されているマタイ 8 章 21 節-22 節の聖書的根拠を検討してみたい。

5）ルカ 9:62.
6）マタ 8:22.
7）Ibid.
8）Deuxième Degré 2, (*Gradus 2*), 653D, DESEILLE (1978) p. 43.

また，〔彼の〕弟子のほかの一人が彼に言った，「主よ，まず行って私の父を葬ることを許してください。」
しかしイエスは彼に言う，「私に従え。そして死人どもに彼らの死人たちを葬らせよ[9]。」

この聖句を含むマタイの 8 章 18 節-27 節には「信従の物語」のエピソードが語られている。また，並行箇所であるルカ 9 章 5 節-60 節と，全体としてその意味内容は一致する。クリマクスがここに引用したと思われる 21 節-22 節を中心に，マタイ福音書の釈義家である U. ルツと D. J. ハリントンの二人の釈義を交差しながら，「キリストに付き従う者」すなわちキリストの信従者とは誰か？　について，考察してみたい。

ルツもハリントンも現代の聖書釈義家であり，彼らの記述が依拠するのはイエスの時代の「生活の座」であって 7 世紀に生きたクリマクスのそれではない。しかし，クリマクスもまた当該福音書が描くイエスを注視し，そのイエスに突き動かされ信従した，と考えられるならば，彼らの釈義をとおして「生活の座」を検証することは，「キリストに付き従う者」のその聖書的根拠を求めることに連鎖し得る重要な意義を持つことになるのではないかと思われるのである。

〔21-22 節 釈義〕

弟子のほかの一人，すなわち二番目の質問者はすでにイエスの弟子となっていた者であった（ルカ 9:59）[10]。それゆえに〔主よ〕と呼び掛けている。したがって，ここでの論点はすでに弟子であることを受け容れられた者の取るべき道の何たるかについてである。弟子はイエスと出立する前に死んだ彼の父親を埋葬し，ユダヤ教でもヘレニズムでも最高位に優先づけられている親への敬虔の義務を果たしたいとの彼の懇願は正当なものであり，その義務に即して考えれば，イエスの言葉はまさに，

9） ユダヤ人には不可侵の，親に対する孝順を無視する言葉。前の「死人たち」は，死者の家族・親族など――したがって，生ける屍の意――を指し，後者の「彼らの死人たち」は文字どおり死んだ者を意味すると思われる。

10） ルカ 9:59 また彼は，他のある者に対して言った，「私に従って来なさい」。しかし，彼は言った，「〔主よ，〕行ってまず私の父を葬ることを許してください」。

その彼にとっては衝撃的なほど冷酷に響いたであろう。宗教的な行為として死者を葬ることの重要性に対しては，トビト記 6 章 15 節等に示されている[11]。律法においては，非常に親密な家族を葬ることに関する義務は日々の祈りを捧げることに対する責務を何ら蹂躙するものではない，と規定されている（m. Ber. 3:1[12]参照）。

弟子の要求は少なくともエリヤに対してエリシャが為したことを連想させる[13]。

> エリシャは牛を捨てて，エリヤの後を追い，「わたしの父，私の母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と言った。エリヤは答えた。「行って来なさい。わたしがあなたに何をしたというのか」と。（列王 1 19:20）

イエスの要求はまさにこの対話の対極にあって峻厳としている。イエスは，「死人たちはお互いの間で自分たち自身を埋葬すればよい」と言う。それはまるで信従を決意した今のおまえには関係のないことではないか，それ以上に為すべき使命があるのではないか，と冷徹に突き放しているかのようである。ルツもまた，ここにおいて神の国のためには家族の絆を断ち切るほどの厳格なイエスの意思の在り様を看て取る[14]。それは明らかに，

> 彼は彼らに答えて言う，「私の母，〔私の〕兄弟たちとは誰か。」そ

11） トビト記 6:14-15 そこでトビアはラファエルに言った。「兄弟アザリア，聞くところによれば，この娘は今までに七人の男に嫁がされたが，男たちは初夜の床に入るとそのつど，死んでしまったということです。そして悪魔が彼らを殺したのだという噂を聞きました。わたしは怖いのです。――悪魔はあの娘には危害を加えず，彼女に近づこうとする男を殺してしまうのですから。わたしは父にとってたった一人息子です――わたしが死んでしまうと，父も母も悲しみのあまり死んでしまうのではないかと，それが心配なのです。父と母を葬る息子はわたしのほかにないのです。」

12） *Berakh* 3, 1 同時代のユダヤ教において，旧約の命令は先鋭化された。親族の埋葬は他のすべてのトーラーの命令に優先する。死体の不浄は制限される（Hengel 10）

13） エリヤが，エリシャにその父と母とに別れを告げることを許したエリシャの召命との比較は，そのことをはっきりさせる。

14） U. ルツ『マタイによる福音書（8-17 章）』小河陽訳，EKK 新約聖書註解，pp.43-45，教文館，1997.

> して自分の周りを取り囲んで座っている者たちを見まわして言う，「見よ，私の母，私の兄弟たち〔だ〕。神の意思を行う者，その者こそ私の兄弟であり，姉妹であり，母〔だから〕だ。」（マコ 3: 33-35）

とあるように，イエス自身がそれを敢然と遂行したことであり，また彼の後に従う者にも，

> 「もしある人が私のもとに来て，自らの父や母や妻や子供たちや兄弟たちや姉妹たちや，そしてさらには自らの命までも憎まないならば，私の弟子になることはできない。自らの十字架を担って私の後から来ない者は，私の弟子になることはできない。」（ルカ 14: 26-27）

と，命までをも捨てきって私に従え，と畳みかけるように要求したことでもあったのである。

ルツによれば，それらの要求は神の国とこの世界との間に存在する深い対立の表現であり，すべてを放棄してイエスの「神の国」告知のための流浪生活への信従とイエスの「神の国」の委託をその身に負った者＝信従者は，その対立を象徴的に生きねばならない使命を帯びる。そのようにして，イエスの信従の要求は深い真剣さと徹底的な非妥協性と，しかし，また何がしか非人間的なものを含むものなのである[15]。ハリントンもまた，イエスに信従すること，イエスの教えの伝道の奉仕と癒しを分かつことは，誰かの父を葬ることの宗教的な儀式による義務をも乗り越え，優先するほどの厳格な使命であったのである[16]。

では，ここで言及されている，死人どもに彼らの死人たちを葬らせよの「死人」とは誰なのか？

15） U. ルツ『マタイによる福音書（8-17 章）』小河陽訳，EKK 新約聖書註解，pp.44-45，教文館，1997.

16） Daniel J. Harrington, S. J., *The Gospel of Matthew*, Sacra Pagina Series Vol. 1, p. 119, The Liturgical Press, Collegeville, Minnesota, 1991.

死人を埋葬するには，そのための人は多くいるだろうけれども，神の国を宣べ伝える者は僅かしかいない。それこそが，信従者たる弟子に関わることなのであり，そこにキリストに付き従う信従者の使命がある。だとすれば，「自分たちの死人」を埋葬すべき「死人」とは，不信仰者，罪びとや異邦人のことである。信仰者と不信仰者の間では，縁者の愛は撤回される。

したがって，イエスの後に付き従った信従者は，「精神的に死んだ」世界と「生活している死人たち」の世界とに決定的に訣別し，実際，死のうちにあるために新しい生命を分かつことのできないこの世の人々に対して，新しい生命を生きる者としてイエスと神の国の側に属すること，神の国告知と言うイエスの使命[17]を分かつ者としての使徒的任務[18]を帯びた途をどこまでも自らの道行として歩むことが徹底して要求されるのである。ここに，「キリストに付き従う者」とは誰か，の結論を導き出すことができよう。その遂行のために，イエスがそうしたように，キリストに付き従う者＝信従者もまた，

> 私〔を愛する〕以上に父や母を愛する者は，私に相応しくない。また私〔を愛する〕以上に息子や娘を愛する者は，私に相応しくない。また，自分の十字架をとって私の後に従わない者は私に相応しくない。自分の命を見いだす者はそれを滅ぼすであろう。また自分の命を私のために滅ぼす者は，それを見いだすであろう。（マタ 10: 37-39）

もはや，キリストよりも自分自身の家族を愛することはしないという峻厳たる孤高の生の在り様，方向性に否応なく向き直させられるのである。それこそがイエスが言明したように，

17） ルカ 9:11 しかし群衆は，〔それを〕知って，彼に従った。そこで彼は彼らを喜んで受け入れ，神の王国について彼らに語り続け，また治してもらわねばならない者たちを癒した。

18） ルカ 9:1 そこで彼は十二人を呼び集め，彼らにすべての悪霊どもを〔支配し〕，〔もろもろの〕病を治す力と権能とを与えた。そして，神の王国を宣べ伝えるため，また〔さまざまの病弱を〕癒すために彼らを遣わし（省略）そこで彼らは出て行って，いたるところで〔福音を〕告げ知らせて〔病を〕治しながら，村から村へとめぐって行った。

> しかし，彼は彼に言った，「死人どもに彼らの死人たちを葬らせよ。しかしあなたは行って，神の王国を告げ知らせよ。」（ルカ 9:60）

という厳命に従うことが，その具体的な体現の方途は多様にわたるとしても，それが信従者たる者の資格なのである。しかし，その資格を全うして生き抜くその彼には，

> ペトロが彼に語り始めた，「ご覧ください，この私たちはすべてを棄て，あなたに従って来ました。」イエスは言った，「アーメン，私はあなたたちに言う。私のゆえに，そして福音のゆえに，家，兄弟たち，姉妹たち，母，父，子供たち，または農地を棄てた者で，今のこの時期に，迫害の中に〔あっても〕，百倍の家々，兄弟たち，姉妹たち，母たち，子供たち，そして農地を受け，また来るべき世においては永遠の生命を受けない者は一人もいない。（マコ 10:28-30）

という，「信従の報い」が報奨として与えられるのである。しかしその報奨は，私のゆえに，そして福音のゆえに「血の繋がりとしての家族」を棄て去って，イエスの意思を担う「神の繋がりとしての家族」を選びとった者のみに担保されるのである。

同時に，その者には，主の創造と救いとがあることをクリマクスは以下のように言明する。

> 主を悲しませるより彼の両親を悲しませる方がよい。というのは，両親は彼らが愛してやまない者たちに破滅を引き起こし，そして彼らを罰に引き渡すのに対して，主は私たちを創造し，そして救いもするのであるから[19]。

修道士に相応しい家族とは，実に「神の繋がりとしての」家族であったのである。

19） CLIMACUS, PG 88, 665D.

クリマクスもまた，キリスト・イエスに付き従う者である限りこのイエスの生に徹底して倣う者である。だとすれば，彼に続こうと意志する者もまたこの生に倣うべきである。この意味で，第一の階梯である「この世の放棄」をようやくの思いで越え，第二の階梯に立った今，修道士をこの世に帰還させようとする金の架け橋である甘美な追想に満ちた「家族との絆を断ち切ること」こそが，修道士を主の創造と救いに与らせ，神の王国を告げ知らせる使徒的使命のその任務遂行の在り様は多様であるとしても，そのことを担っての道行をどこまでも歩まねばならない修道士の不撓不屈の覚悟と自覚を何層にもわたって強固に築き上げなければならない，喫緊の克服すべき課題であったのである。

ここに，クリマクスが「家族の絆を断ち切ること」の徹底した要求を為した根拠を置くことができよう。

Ⅲ　悪魔との闘いとは何か――悪魔との闘いは修道士に何をもたらすのか？

「家族の絆を断ち切ること」，それはイエスが辿った道であり，クリマクスが辿った道である。しかし，その道は見えざる悪魔との闘いの過酷な試練が待ち受ける道でもあったのである。

> 1．この世を放棄した後で，悪魔は，この世で生きる人々の慈悲深くそして憐れみ深さを羨ましく思うべきであり，これらの甘美な追想を自ら放棄しているあなたたち自身を哀れに思うべきだ，と修道士にそれとなく仄めかす。敵の魂胆は偽りの謙遜によってこの世に帰還させようと企む……[20]

> 10．私たち（＝修道士）の放棄の後で，悪魔どもが，私たちの両親や兄弟が私たちの心を湧き立たせる追憶によって，燃え上がらせる時はいつでも，祈りでそれらに抗して自身を防備していようではないか。そして永遠の火の記憶で私たちの心に火をつけ燃え上がらせようではないか。その結果，私たちの心の折りの悪い火が掻き消さ

20）　Deuxième Degré 3, (*Gradus 2*), 656A, DESEILLE (1978) p. 44.

れるであろう[21]。

クリマクスによれば，「悪魔は嵐のような強襲，略奪に向けてたけり狂ったように集中する海賊に似ていて，私たちが持ち得たあるいは獲得しようとするいかなる徳[22]」をも失わせる存在である。悪魔が何らか手に入れようと試みるものは，私たちの財産など可視的なものではなく魂の破壊である。私たちが徳と考えるものは，私たち自身の手になるものではなく，それは神の領域に属する。悪魔どもはありとあらゆる武具をもって私たちを惑わし，欺こうとひたすら努力を傾注する。彼らは私たちから選びとることの自由を剥奪しようと付け狙う。「人は徳を求めて熱心に取りかかろうとすると，精神的，肉体的な生活の中で悪魔に脅かされ，現実の生活の中で，邪で底意地の悪い人々に容赦なく晒される[23]。」

種々異なった存在あるいはそれらの矛盾対立する現れであるこの徳の相反する本性が，悪魔の相貌を持って私たちに間断なく襲い掛かる。しかし，真の徳は逆説的に情念の餌食である人間のうちにも露わに示される。「真の徳の光すなわち太陽が黄金の煌きを放つ時，徳はそれを所有する人の真実を明らかにする[24]」，とクリマクスは修道士に警告を発する。

独善あるいは虚栄心[25]から生じる行為は，この上ない不和を生じさせるがゆえに，究極の悪魔的な陥穽なのである。そこに陥らないために修道士は絶えず謙遜を防具としていなければならない。謙遜とは，「以前からそうであったように今も，不当に奪われることのない唯一の徳[26]」であり，謙遜を通じて「人は悪魔の激しい攻撃や脅迫に対抗して断固として闘い抜くことが出来る[27]」からである。

霊的な修徳修行の初めに立つ者は「徳に敵対するものによって不安に

21） Deuxième Degré 10, (*Gradus 2*), 656D, DESEILLE (1978) p. 45.
22） CLIMACUS, PG 88, 1061D.
23） Ibid.
24） Ibid., 1064B.
25） Ibid., 949B, 953C, 956AB.
26） Ibid., 993A.
27） Ibid., 1001D-04A.

貶められるかもしれないが，彼らの希求する目的の照準は徳を持った人となること，徳とともにあること，その徳を追求することによって，終局として神と合一すること[28]」にあり，「この一致は単に霊的であるだけではなく肉的すなわち身体をも包括し，もし私が打ち倒されて身体を失うならば徳をしっかりと繋ぎとめておくものは何もない[29]。」実に身体なくして徳はありようがないとクリマクスは言明して，この闘いが霊と肉，心身全体を通して闘い抜かれるものであり，謙遜という防具を最強の武具に替えての積極果敢な闘いであることを修道士に自覚させる。

「徳の獲得は情念の制御と同様に瞬時にして成し遂げられる行為ではない[30]」，「苦難の始まりは徳の始まりである[31]」と，クリマクスは言う。徳はそのとき，始まりでもあり継続，それも終わりのない継続である。人は決してあらゆる徳を身につけることはできない。人がそのように思える時でさえ，今なお神から遠く隔たっているがゆえに，クリマクスは「あなたが，たとえ，徳のすべての梯子を登り終えたとしても，罪の赦しのためにたえず祈りなさい[32]」と言うのである。まさに徳の完璧さに辿り着いたと思える時でさえも，神は捉えられない。徳を獲得することは，それらを所有することではない，とクリマクスは教え諭す。

純粋にそして誠実に神を求める人から神は遠く離れていない。しかし，神は永遠に捉え難いまま存在する。「すべての被造物はその創造主から存在することの命令と始まりと，そして終わりをも受け取った。徳の究極目標に終わりはない[33]」とし，修徳生活は終点の在り得ない上昇の途であることを，クリマクスは言明する。

「多くの道は敬虔と破滅に連なる小道から成る[34]」とクリマクスは言う。唯一の道だけがあるのではなく，救いへの多くの道が存在している。実に，人はその人固有の救いへと至る，あるいは救いから離れて何か他へと導かれるその人固有の――たとえ独自のものではないにしても――

28） Ibid., 969A.
29） Ibid., 901D.
30） Ibid., 1089C.
31） Ibid., 1092B.
32） Ibid., 1132B.
33） Ibid., 1068A.
34） Ibid., 1036B.

道を歩む。クリマクスはいかなる一方的な指示を与えることも道徳的な解決策を示唆することをも厳に慎む。彼はそれぞれの道が人間本性の復活と神の恵みの照らしに向かう大街路へと通じて行く限り，修道士個々それぞれの事情に適した，神へと向かう修徳生活に取り組むことを支援する。

クリマクスにおける悪魔とは誰か？　それは，さまざまな相貌をもった情念の混成体であり，不法侵入者である。人々のより霊的，精神的に向上しようと熱望する高い志の成就を阻止する者であり，また真実の本性に対抗する振る舞いへと人々を強要し威圧しようと企てる異質で圧倒的な力である。

この力は人間の自由を剥奪し，自堕落に陥れ，人間の義を真摯に求める姿とは全くかけ離れたものとしての死に人を至らしめる。人間は自由なる主体であると同時に，悪魔的な力によって揺さぶられ，惑わされる寄る辺ない存在でもある。しかし，クリマクスの禁欲的苦行としての悪魔との霊的な闘いとは，人間本性の脆い心性から生じる単なる悔恨の克服に留まるのではなく，それは神の恵みによっていっそう明るく照射され一つに結び付けられた，もともとの本性に一致するそのような強固な生き方のあることの実現を賭した熾烈な闘いを意味している。

したがって，この闘いのうちに潜む肯定的な視座のあることをクリマクスは看破しているように思われる。というのも悪魔からの執拗な誘惑や試みに揺さぶられることこそが，修道士を神との合一と言う，その僥倖の頂に向けて突き進もうと意志させる推進力の源泉となりうることを，クリマクスは自身の闘いの中から知り尽くしていたであろうからである。

隠修士アントニオスは言う。「いったい誰が誘惑を体験することなく天の王国に入ることが出来ようか」と。そして彼は確信に基づいて繰り返す。「誘惑がなければ誰も救われることはないであろう[35]」と。誘惑は，それによって肯定的な特質，性格を獲得する。オリゲネスは「誘惑を通じて私たちに啓示される，優れて善きものに感謝を捧げよう[36]」と言って，誘惑に感謝の根拠を見ている。さらに新神学者シメオンは，

35） *Apophth*. Anthoy 5 (PG6. 77A); Athanasius, *Life of Anthony* 56 (PG 26. 952A), Abba Isaak the Syrian, *Mystic Treatises* (50 and 188).

36） *De or*, 29, 17 (391, 160-61).

「あなたがいとも優れて善きものとなるためにあたかも悪魔どもがその根拠，礎になっているかのように，愛すべき誘惑から学びなさい[37]」と言う。これらは，クリマクスの視座を十全に援用するものとなるであろう。

悪魔はそれ自身によっては何の力も持たない。しかし，神がそのように振る舞うことを許しているがゆえに，彼らは大手を振って悪魔足り得るのである。こうしたクリマクスの理解から[38]，彼らは修道士たちの救いのために神によって用意され，用いられた道具であると見做すことができよう。結局は，悪魔どもは修道士たちの栄誉を象徴する王冠のゆえに存在しているのである[39]。

悲しみ嘆くことがなければ，救いは在りえない。悪魔がいなければ，天の御使いたちもまた存在しないであろう。こうして，砂漠の独房のなかで修道士たちはほとんど自分を苛み，痛めつける苦行に耐え抜くなかで，なお一層の誘惑と試みに身を委ねることを願いさえして，さまざまな苦悩の諸相を見せて祈る。

> 悪魔に取り憑かれるために祈る者あれば，癲癇が起きるように主に懇願する者もいる。目を繰り抜いて欲しいと願う者もいれば，軽蔑に値する光景が現れ出ないかと期待する者もいれば，それを見て痙攣する者もいる[40]。

悪魔の姦計に満ちて狡猾な誘惑，罠のすべては，実に将来あるべき姿に修道士たちを変容させるための神の計らいの最終的な構想のもとにあったのである。

> もっとも驚くべき，そして感嘆すべき光景は，ある悪魔がある悪魔をその手で息の根を止め追放することにある。おそらくこのことは悪魔の業になるのではなく，神の摂理，計らいの業が成すのであ

37） Cat. 2 (242).
38） CLIMACUS, PG 88, 1069AB.
39） Ibid., 1069A, 1061AB.
40） Ibid., 776A.

る[41)]。

そして，この霊的な修徳修行の初めに立つ者にクリマクスはこの悪魔との闘いがもたらすものを第二の階梯のここにおいてまさに予感させる。この予感が修徳生活を続けて行くことの一筋の光となるからである。

> 6. ……自分自身の意志を断ち切ること，苛立ちに対する忍耐，嘲りを受けても愚痴を言わずに耐え抜くこと，辱めに対しても故意に注意を払わないこと，そして諸々の悪癖にも。不正にあったとしても，断固としてそれを受けること。中傷，誹謗を受けたとしても憤然としないこと。公衆の面前で恥をかかされても腹を立てないこと。咎められ非難されても謙虚であること。今まさに，私が記した道に従うものに祝福あれ。その彼らのために天の王国はある[42)]。

修道士がその身に進んで受けるあらゆる屈辱と試練を耐え忍ぶことは，実は狭く細い道を歩いているのではなく，天の王国に連なる大街路を歩いているのだと諭し，その途に従う者を祝福する。そして，その王国に入るためには，とクリマクスは言う。

> 6. 次の三つのことを放棄しない限り，誰も王冠を身につけて天の花嫁の寝室に入ることはできないだろう。私が意図するところは，仕事，人々，家族にまつわる様々な事柄の放棄，その人自身の私的な意志を断ち切ること，そして，三つ目の放棄である犬の従順さに似た鼻持ちならない自尊心の放棄。……誰が奇跡をもたらしたであろうか？　誰が死者たちを蘇らせたであろうか？　誰が悪魔どもを追い払ったであろうか？　いや，誰もいない。すべてこれらの狭き道は修道士のみに与えられる勝ち誇った報奨，この世では授けられない報奨なのである[43)]。

41） Ibid., 841B.
42） Deuxième Degré 6, (*Gradus 2*), 656A, DESEILLE (1978) p. 44.
43） Deuxième Degré 7, (*Gradus 2*), 656B, DESEILLE (1978) p. 45.

クリマクスのこの言葉には，悪魔が神によって用意された道具であり，その彼らが修道士たちの栄誉を象徴する王冠のゆえに存在している，と言うことのまさに証となろう。天の王国に入ること，そのことこそが，禁欲生活における苦行あるいは独居における孤独のうちにあって，そこに繰り広げられる悪魔との闘いが修道士にもたらす果実であり，報奨であると言えるのではないだろうか。

Ⅳ 「欲望から超然としていることとは何か？
――絶えず覚醒していること

「次の三つのことを放棄しない限り，誰も王冠を身につけて天の花嫁の寝室に入ることはできないだろう」とクリマクスは告げる。すなわち，第一に，仕事，人々，家族にまつわる様々な事柄の放棄，第二に，その人自身の私的な意志を断ち切ること，そして，第三に，自尊心の放棄である。それをきっぱりと為し得ないのであれば，修道士はその報奨を得ることはできないとクリマクスは言明する。つまるところ，その三つのことの放棄そのものが，「欲望から超然としていること」の意味であり，そのことの実践が神へと一心に，そして一筋に向かう道行の最初の一歩である，と結論づけられるであろう。同時に，クリマクスは霊的な闘いから退却していく修道士の在り様を見て，ある精神的な状態を要求する。

> 6. この世を憎悪するようになる人はその悲痛から逃れる。しかし，目に見える何かに愛着を持つ人は，未だにその悲しみから解放されてはいない。というのは，私たちが愛するものが失われるならばどうして悲しまずにおられるであろうか？　私たちはすべてのことにおいて，絶えず覚醒（ネプシス）していることが必要である。とりわけ，現世に残してきたものにはすべての配慮を与えなければならない[44]。

ネプシスとは，精神的・霊的に覚醒しており，注意深く心の動きを監視することである[45]。従って，心の在り様の変化を注意深く警戒して監

44） Deuxième Degré 8, (*Gradus 2*), 656CD, DESEILLE (1978) p. 45.

視することこそが，怠惰と情念の囚われの身であり，絶えず心もとなく揺れ動く修道士の心的状態を炙り出して気づかせ，神に至る道を点し続ける霊的な篝火となるがゆえに，絶えず覚醒（ネプシス）していることが「欲望から超然としていること」に至り着くためには必要なことであると，クリマクスは説くのである。

結　語

> 18．もし肉体的な愛の欲望に傾きがちで奢侈な習慣を好みがちな傾向にある若い人が修道生活に入りたいと願うならば，しっかりと断食と祈りとで自分自身を訓練させようではないか。そして，あらゆる奢侈と邪悪な行いを慎むよう説得しようではないか。彼らにとってその最後が最初よりも悪くなることがないように。この港は人に安全を与えるが危難に晒しもする。霊的な海を航海する人々はこのことを重々知っている。この港において，大海で難破という状況を切り抜けてようやくの思いで危難を乗り越えて生き残った者たちを見ることは慈悲に満ち溢れた光景である。
>
> これが第二の階梯である。この競争を走る者たちは，ロトの妻ではなくむしろロトその人自身に倣い，走り抜けようではないか[46]。

クリマクスはこのようにして修道士に言い聞かせ，第二の階梯の終わりを告げる。

この階梯に絶えず一貫して流れていた通奏低音とは，先述のマタイの聖句（マタ 10:37-39）であったのではないだろうか。欲望の諸相の最も断ちがたく甘美な「家族との絆を断ち切ること」を徹底して要求したクリマクスの真意は，

> また，自分の十字架をとって私の後に従わない者は私に相応しくない。自分の命を見いだす者はそれを滅ぼすであろう。また自分の命

45）　大森正樹，『祈りの系譜(7)――ヘシュカスム研究　ヨアンネス・クリマクス(1)』，『エイコーン』第 25 号，p.43，新世社，2002.

46）　Deuxième Degré 18, (*Gradus 2*), 657BC, DESEILLE (1978) p. 46.

を私のために滅ぼす者はそれを見いだすであろう。（マタ 10: 38-39）

と言う，このイエスの言葉のうちにこそあったのではないか。この言葉をまさに決然と生きようと意志することによって，修道士自らの命をイエス・キリストの命のうちに滅ぼすことで，イエスに繋がれてあることの永遠の命の恵みへと到り着く，その道行きの最初の一歩を，修徳生活の初めに立つこの階梯であるからこそ，修道士の後背を押して，踏み出させようとしたところにあったのではないか。そのことが，クリマクスにとって，真に霊的な修徳生活に入って行くことであったであろうからである。そこに，第二の階梯「欲望から超然としていること」の意義を見出し，この階梯を克服することの結論としたい。

しかし，霊的にはようやく第二の階梯を踏みしめたばかりである。言の葉が口先に宿ったばかりの言ってみれば嬰児の存在でしかないのであれば，「欲望から超然としていること」の意義がここに見てきたことであることを，この段階の修道士が真実，理解し体得し得ているとは言い難いであろう。未だ，隧道の遥か先，一点の光となって朧気に見えるに過ぎないからである。

第三の階梯（*Gradus 3*）である「ペリ・クセニテイアス」では，修道士自ら「この世の寄留者」となることとは何かが論じられる。修道士がひたすら己を棄ててこの世の離脱を目指す時，あらゆる機会を通して悪魔は其処彼処に陥穽を用意して待ち受ける。それは夢の中にまで立ち現れる。愈々，本格的に欲望の諸貌を持つ悪魔が修道士に襲い掛かるのである。その階梯の考察については次なる課題としたい。

参考文献

J. -P. Migne (ed.), *Patrogia Graeca*, t. 88, Paris, 1864, pp. 1096-1164.

Saint Jean Climaque, *L'échelle Sainte*, Traduction française par le P. Placide Deseille, Abbaye de Bellefontaine, Bégrolles-en-Mauges, 1978.

St. John Climacus, *The Ladder of Divine Ascent*, translated by Archimandrite Lazarus Moore with an Introduction by M. Heppell/ Faber and Faber, London, 1959.

Walter Voelker, *Scara Paradisi, eine Studie zu Johanness Climacus und zugleich eine*

Vorstudie zu Symeon dem Neuen Theologen, Wiesbaden, 1968.
John Chryssavgis, *John Climacus, From the Egyptian Desert to the Sinaite Mountain,* Ashgate Publishing Limited, 2004.
Daniel J. Harrington, S. J., *The Gospel of Matthew, Sacra Pagina Series Vol. 1,* The Liturgical Press, Collegeville, Minnesota, 1991.
大森正樹『祈りの系譜(7)――ヘシュカスム研究　ヨアンネス・クリマクス(1)』，『エイコーン』第 25 号，新世社，2002.
大森正樹『祈りの系譜(8)――ヘシュカスム研究　ヨアンネス・クリマクス(2)』，『エイコーン』第 26 号，新世社，2002.
大森正樹『祈りの系譜(9)――ヘシュカスム研究　ヨアンネス・クリマクス(3)』，『エイコーン』第 27 号，新世社，2003.
U. ルツ著，小河陽訳『EKK 新約聖書註解 I /3 マタイによる福音書（18-25 章)』，教文館，2004.
桑原直己著『東西修道霊性の歴史』，知泉書館，2008.
新約聖書翻訳委員会『新約聖書』，岩波書店，2004.
共同訳聖書実行委員会『聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき』，日本聖書協会，2004.